



# 十五年目の花便り

【熊本県】大野 智和 おの ともかず 42歳

「足湯をよかですか」。僕より一  
つ年上のHさんから、申し訳なさそ  
うに声を掛けられた。

Hさんは重度の拡張型心筋症の  
患者だった。厳しい安静指示や飲  
水制限があり、大きな身体をベッ  
ドの上で窮屈そうにしながら、小  
さなお猪口ちとせに少しずつ水を注いで  
喉の渴きを潤そうとする姿が印象  
的だった。効果的な治療がなく対  
症療法でしのご毎日。ようやく仕  
事に慣れてきた僕ができることとい  
えば、身の回りのお世話と足浴ぐ  
ら이었다。

Hさんの容体は日に日に悪化し、  
ついに足浴もできなくなつた。そし  
て今後の治療をゆだねるため大学  
病院に転院していった。空になつた

ベッドを見て「僕に何ができたのだ  
ろう」。そう自問したが、答えは何  
も出てこなかった。

心が晴れないまましばらくたち、  
通り掛かった花屋の軒先で早咲き  
の桜を見掛けた。「Hさんはもう桜  
を見られないかもしれない」。僕は  
その桜を手に大学病院へ向かい、H  
さんの元へ届くように託した。それ  
から桜の花が開くたびに、Hさんの  
ことが脳裏をかすめた。

14回、桜の季節が過ぎ僕が救急  
外来で夜勤をしていた時のこと、あ  
る心不全の男性が搬送された。「息  
子も心臓が悪くて世話になつて、  
今ではすっかり元気です」。同じ名  
字に同じ心疾患。「まさか」と思っ  
たその時、部屋に入ってきたのはH

さんその人だった。僕たちは再会が  
うれしくて、思わず肩を抱き合った。  
大学病院に移ったのち心臓移植を  
受けたこと、届けられた桜の話を  
今でも奥さんとする。語られ  
るHさんの言葉に、僕は心の底から  
喜びを感じて目頭が熱くなった。

「僕に何ができたろう」。日々の  
看護を行う中で、僕は繰り返し自  
分に問い掛ける。答えが見つかるこ  
とはないが、Hさんと固く交わした  
握手にその片鱗かたなが見えた気がした。  
答えを追い求めていく姿勢をいつま  
でも忘れることがないように、握る  
掌てのひらに力を込めた。

願わくはこれから先もずっと、H  
さんに桜を愛めでる季節が訪れます  
ように。